

2023 年度（令和 5 年度）

学生による授業評価アンケート
実施報告書

福山大学大学教育センター
教育開発部門

はじめに

福山大学は、次の6つを教育目標として掲げ、この目標を達成するべく、日々、教育の改革と改善に取り組んでいる。

福山大学教育目標

- (1) 真理の探究と道理の実践
- (2) 豊かな品性と強い意志の涵養
- (3) 生命と自然の尊重
- (4) 個性の発揮と信頼に基づく人間関係の構築
- (5) 可能性への挑戦
- (6) 地域社会の発展への貢献

教育とは、学修者の行動に価値ある変化をもたらすプロセスであり、「何を教えたか？」ではなく、「学修者が、何ができるようになったか？」が問われる。通常、教育者は、教育の効果を試験の結果、すなわち学修成果として認識し把握している。

しかしながら、真に教育を改善するためには、学修者からの忌憚のないフィードバックを得ることは必要不可欠である。このため福山大学では、自己評価委員会が平成16年度に実施して以来、本学のすべての教員が毎年、学生による授業評価を受けている。平成23年度より大学教育センターが担当することになり、学生による授業評価だけでなく学生自身の学修の点検も加えたアンケート調査を実施している。

令和5年度も、大学教育センター教育開発部門が「学生による授業評価アンケート」を実施した。このアンケート調査結果が、教員と学生がそれぞれの目標とする教育と学修の成果向上の機会となることを願っている。

令和6年3月31日

大学教育センター センター長 鶴田 泰人

同教育開発部門 情報工学科 金子 邦彦

IR室 片桐 重和（データ集計・解析）

1. 目的

本学では、教育の質の向上と学修効果の向上を目的として、「学生による授業評価アンケート」を実施している。このアンケートは、学生の視点から授業の内容や教員の教授法を評価するとともに、学生が自身の学修態度を定期的に振り返る機会を提供している。

2. アンケートの実施方法

(1) アンケートの項目

アンケートは、「授業評価」に関する7項目と「学生の自己点検」に関する7項目の合計14項目で構成されている。その他、自由記入欄がある。学生は、アンケートの回答を通じて、授業評価を行うとともに、「学生の自己点検」においては、授業に積極的に取り組んでいたか、主体的に学ぼうとしていたかなど、自身の受講態度についての確認を行う機会を得る。

- 「授業評価」の項目

1. 授業準備、2. 教員の話し方、3. 授業の計画性、4. 授業準備、5. 授業の工夫、6. 質問への誠意、7. 授業への満足度

- 「学生の自己点検」の項目

8. 関連学修、9. 集中力、10. 出席状況、11. 知識や技能の深まり、12. 授業内容理解への積極性、13. 意欲の高まり、14. 学習の成果

(2) アンケートの対象

全学生を対象としている。対象とする科目は、令和5年度は、原則、各教員前1科目、後期1科目（実習・演習を含む）として実施した。

(3) アンケートの実施方法

アンケートは、「セレッソ」を用いて実施している。

(4) アンケートの回答期間

令和5年度の、学生によるアンケート回答期間は次の通りである。

前期：令和5年6月26日（月）～7月14日（金）

後期：令和5年12月11日（月）～令和6年1月19日（金）

（5）アンケート結果のフィードバックと活用

アンケートの結果は、前学期と後学期の終了時に、授業担当教員に通知される。授業担当教員は、通知されたアンケート結果を分析し、自身の授業の強みと弱みを把握するとともに、学生の学修への姿勢や態度を確認する。そして、学生の評価を受け止め、授業改善のための方策を検討する。その際、授業担当教員は、授業内容、教材、教授法の工夫など、多岐にわたり改善を検討する。さらに個々の授業担当教員は、受講者全員にアンケート結果についてのフィードバックを行うことにより、学生は自身の強みと弱みの認識、自身の学習態度の改善、授業に関するより深い理解などを行う。

以上のように、アンケートを通して、教員と学生との双方向のコミュニケーションを行い、教育の質の向上と学修効果の向上を行う。その際、教員と学生が、相手側の視点にも立って授業を振り返る機会を得ていることも特徴である。

（6）学科・センター等のレベルでの点検の実施

本アンケートの結果は、授業担当教員による点検のみならず、学科やセンター等の組織レベルにおいても点検される。その際、学科・センター等の責任者が、所属教員全体のアンケート結果について分析を行い、組織としての改善策を検討する。あわせて、学科・センター等では、所属教員から授業改善に関する意見や提案を募り、組織全体での改善に活用する。

（7）全学レベルの点検の実施

学科・センター等のレベルでの点検の結果、アンケートの「授業評価」、「学生の自己点検」のそれぞれについて分析結果がまとめられ、改善策が検討されると

ともに、所属教員からの授業改善に関する意見や提案が集められる。それらは、年度末に大学教育センターに報告され、大学全体で集約されることにより、大学全体での教育の質の向上をより効果的に進めている。

3. 全体の評価結果

アンケートの回答を全学で集計した結果は、次の通りである。

受講者数（のべ）	13,996 名
回答者数（のべ）	7,403 名
回答率	52.9%
「授業評価」に関する 7 項目の平均	4.60
「学生の自己点検」に関する 7 項目の平均	3.78

回答率は 52.9%と良好である。対象者は全学生であり、任意で回答するものであり、そのことを踏まえ、回答率は高いと判断される。「授業評価」に関する 7 項目の平均は 4.60 である。1 から 5 の 5 段階評価であることを考えると、評価値は極めて高い。この高い評価が今後も維持されることが望ましい。学生の自己点検」に関する 7 項目の平均は 3.78 と高いものであり、望ましい結果である。以上のように、回答は順調に得られており、集計した結果値は良好である。

4. 教員からの意見・提案

学科・センター等のレベルで、教育の質の向上と学修効果の向上の意見・提案を集約した。令和 5 年度も多数の意見、提案を多数収集できた。それらは、授業内容、教材、教授法の工夫、学生への期待など多岐にわたり、教育の質の向上と学修効果の向上に役立つものである。以下にまとめている。

(1) 授業内容

- 学生の興味を引くような話題提供や実例、最新の話題を多く取り入れる
- 学生の理解度に合わせて難易度を調整し、到達点のレベルを段階的に設定する
- 授業の目標や到達点を明確に提示し、授業開始当初と終了前での学生の成長を明確にする
- 実社会での実践能力や他の講義との関連性、将来の実務にどのように役

立つかを具体例を挙げて示す

- 科目間のつながりを伝え、意識して実践させる
- 他の学問領域につながる話題を提供する
- 資格試験と授業との関連性を明確にし、学修意欲を向上させる
- 倫理を学ぶことで学修成果の向上を目指す
- 1回の講義で扱うトピックを絞り込む
- 学生の反応を見ながら、毎年新しいトピックを含めていく
- 抽象的な概念を説明する際には多くの事例を用いて説明する
- 学生の知識と理解の個人差を考慮し、講義内容と難易度を常に検討する
- 高校までの知識や専門性によって学生の理解度に差があることを考慮する

(2) 教材

- 講義内容をまとめた資料をオンラインで配布し、復習やその他準備学習に活用する
- 関連する DVD などの視聴覚教材や動画、AV 教材を活用してケーススタディや授業中の演習を強化する
- 学生が興味を持つような資料を追加し、必要に応じて教科書を変更する
- 練習問題や課題を増やし、学生の理解度に応じた複数種類の演習問題を提供する
- ChatGPT を活用し、授業中の演習を強化する
- スマートフォンでも見やすい講義資料を作成する
- セレソの活用を増やし、事前講義資料の配布、小テスト、練習問題、課題を増やす
- 紙媒体の講義資料を必要とする学生数を事前アンケートで把握し、紙の無駄を減らす
- 授業開始前に、学ぶ内容についての動画をセレソに準備し、視聴させる。
- 授業開始前に、演習問題をセレソに準備する
- 数学の復習用コンテンツを用意する
- 授業資料を早期にオンラインでアップロードし学習を促進する

(3) 教授法の工夫

- アクティブラーニングを導入し、ディスカッションやグループワーク、プロジェクト演習、ワークショップを取り入れる
- 学生の反応を見ながら、理解を確認しつつ進め、質問しやすい雰囲気作りを心がける
- ワイヤレスマイクを用いて教室内を移動しながら講義を行い、集中力を維持する
- 重要な部分は繰り返し説明し、学生への個別フィードバックを増やす
- セレソを活用して質問を促したり、ディスカッションの機会を設け、学生参加型の授業を工夫する
- 学生によるプレゼンテーションの機会を増やし、作品についての感想や意見を聞く機会を設ける
- 授業の冒頭で簡単なアンケートを実施し、問題意識を持たせる
- 授業準備・復習における学習内容を学生と共有する
- 身近な現象や具体的な事例、題材を取り上げる
- ルーブリックを活用して学修成果を把握する
- アクティブラーニングの視点から文献や事例調査を課し、自ら知識を取りに行くスタイルの課題を増やす
- 小テストの解答・解説を次の時間の最初に行い、復習の機会とする
- 大人数の授業でも学生が考える機会を増やす工夫をする
- スモールグループディスカッションではグループ間の巡回数を増やすなど声掛けを工夫する
- 問題解説を行う際に、質疑応答の時間を設け、学習意欲を高める
- 講義の始めと終わりに小テストを組み込み、復習とおさらいを定期的に行う
- 授業毎に確認試験を行い、理解度を把握しながら進行する
- 学生自身が考えながら学ぶ時間を設ける
- 机間巡視を積極的に行い、学生の理解度を頻繁に測る
- 小テストでセレソのドリル機能を用い、繰り返し学習を促す
- 授業の終わりに次回の内容と課題を具体的に伝える
- 課題レポートできめ細かいフィードバックを行う
- 双方向的な授業進行を図る

- 座学にも演習系の要素を取り入れ、学修意欲を高める工夫が必要

(4) 学生への期待

- 予習・復習を促し、授業時間外の学習時間を増やして自主学習の習慣を身につけさせる
- グループワークやディスカッション、グループ制作に積極的に参加することを求め、コミュニケーション力を鍛える
- 意欲的に授業に臨むよう働きかけ、主体的に新しい知見を身につける姿勢を醸成する
- 自分で考え、意見を述べる機会を設け、発表や質疑応答を通じて全員の主体性を引き出す
- 授業で学んでいることと実生活とのつながりを意識させる
- 座学でも集中力を維持し、実習系の授業との接続を意識させる
- 成果を得たと感じるような宿題に取り組ませる
- 講義内容に関する宿題や課題を出し、自宅での学習意欲を高める
- 講義以外でも学習を促すような方法を考える
- 勉強法そのものを教示し、学修成果が上がるようにフォローする
- 自宅学習の機会を増加させる

(5) その他

- 学生の学習意欲を高めるために、コミュニケーションを図る
- 授業外での見学会の実施を検討する
- ICTの使い方を学生に適切に周知し、授業への積極参加を促す
- 学生の生活リズムや健康面について心配している
- 配当学年や開講期の再考が必要な科目がある
- 教員の話し方を改善し、わかりやすい説明を心がけるように求める
- 授業を担当する教員を1人に変更し、一貫性のある教育を行う
- FD研修は、非常勤講師も参加を求め、授業改善のアイデアを共有する
- 出席率の改善に取り組む
- 来年度の学生と今年度の学生コメントを共有し、学びへの意識を高める

4. 「授業評価アンケート」の7項目による考察

各学科・センター等で実施された「授業評価アンケート」についての7項目の分析結果と改善策の検討は次のようにまとめることができる。

- 各学科・センター等では、それぞれの学科やセンターの特性に応じて分析が実施され、全学平均を下回る評価結果となった評価項目に注目したり、全学平均を下回る評価結果となった科目に注目したりなど多様な分析が実施されている。
- 分析の中では、多数の専門科目が開講されているが、学生の興味や知識レベルのばらつきがあり、そのことが授業評価アンケートの結果に影響を与えている可能性があり、一概に教員の力量や、授業内容に問題があると決めつけてはいけないと示唆されている。
- 授業評価アンケートの回答率が低くなることを避けるために、学生への周知が徹底されている。
- 分析の結果による、教材やカリキュラム等の改善が継続している。
- 各学科・センター等のレベルの改善策として、シラバスやカリキュラムマップを通じて、科目間の関連性や授業の目的を学生に明確に伝え、学習意欲を高めること、教材の調整、授業内容の調整、カリキュラムの調整、オフィスアワーの周知、セレッソを利用した学生・教員のコミュニケーションが有効であるとされている。

以上の取り組みにより、学生の学習成果をさらに高めることが図られている。以上のようにアンケートを活用した点検と改善のプロセスは全学で機能している。

5. 「学生の自己点検」の7項目による考察

「学生の自己点検」に関する全学の状況としては、自主的な学習時間の時間増、学生の学習意欲の向上が重視されている状況である。

- 学生の自主的な学習時間（予習や復習などの関連学修）の時間増のための取り組みが実施されている。
- 「授業内容理解への積極性」や「意欲の高まり」など、学生の学習意欲が重視され、取り組みが実施されている。
- 一部の学科では、「出席状況」が全学平均を大きく下回っており、学生の出席率の向上を課題としている。

「学生の自己点検」の得点改善については、具体的な改善策が全学科・センター等で継続されて実施している。令和5年度も学科・センター等が作成した報告書により、種々の取り組みが多数確認された。その中の主要なものは次の通りである。

- 教員は、予習・復習など「関連学習」の時間を増やすために、課題や事前学習を増やし、学生の自主的な学習を促進する。
- アクティブラーニングの授業を増やし、演習、自己探求、リサーチワーク、グループワーク、ディスカッションなどを通じて、学生の授業内容理解への積極性と学習意欲を高める。
- 授業内容と関連する実社会の事例や時事問題を取り上げるなど、教材や指導法を工夫し、学生の興味・関心を引き出す。
- 小テストやレポート課題を活用し、学生が、自己の学習成果を確認、実感できるようにする。

6. 総評

本学における「学生による授業評価アンケート」は、教育の質と学修効果の向上を目的として実施されており、学生の視点から授業内容や教授法を評価するとともに、学生自身の学修態度の振り返りの機会となっている。アンケートは全学生を対象に実施され、回答率は52.9%と高く、学生の積極的な参加が見られる。

「授業評価」に関する7項目の平均は4.60と極めて高く、教員の授業準備や教授法などの力量の高さが示されている。また、「学生の自己点検」に関する7項目の平均は3.78と良好であり、学生の学修態度や学習成果についても肯定的な評価が得られている。

アンケート結果は、授業担当教員による分析と改善策の検討、学生へのフィードバックに活用されるだけでなく、学科・センター等の組織レベルでも点検・改善に役立てられている。さらに、全学レベルでの集約により、大学全体の教育の質向上に効果的に結びつけられている点は特筆すべきである。

令和5年度も、教員からの意見・提案は、授業内容、教材、教授法の工夫、学生への期待など多岐にわたり、教育改善への積極的な姿勢が感じられる。特に、学生の興

味を引く話題提供、理解度に合わせた難易度調整、実社会との関連性の提示、アクティブラーニング、ICT の活用など、効果的かつ具体的な改善策が提案、実施されている。

「授業評価アンケート」の 7 項目による考察では、各学科・センター等の特性に応じた多様な分析が行われ、改善策の検討や実施が継続的に行われていることが確認された。「学生の自己点検」の 7 項目による考察からは、自主的な学習時間の確保と学習意欲の向上が広く認識され、様々な取り組みが実施されていることが確認できた。

以上のように、「学生による授業評価アンケート」は、教育改善のための PDCA サイクルを機能させる仕組みとなっており、全学を挙げての教育の質向上への努力が顕著である。